

本を選ぶ

NO.465 2024年(令和6年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>クレソン 続

●図書館を離れて (第60回)

—続「おおかみと七ひきのこやぎ」—



●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

クレソン 続

料理評論家のYさんの講演会へのお誘いがあったのは同窓会の会長さんからだった。お付き合いだから仕方ない、行ってみた。だが、意外にもと言えば失礼だが講演は時宜を得たものだった。折しもミシュラン・レストランガイドがよいよ日本上陸を果たし、東京のレストランの格付けが発表される直前という頃だ。Yさんはその予想を立てて発表しなかったのだろう。日本のフランス料理や食文化が世界レベルとして認められるその日を待ちわびたYさんの言葉は熱気を帯び、聴衆に直に伝わってくる。最高位の三つ星レストラン候補をずばり予想し、その見立てでそのレストランに足を運んで味わってほしいとまで訴えた。

丁度その頃、「別冊文藝春秋」に連載され後に単行本となった小説『美味礼賛』海老沢泰久著／文藝春秋／1992年)を読んでいたのもあって、Yさんの講演は俄然興味を惹く内容であった。辻静雄の半生を扱った読み応えのある評伝である。フランス料理を西洋料理と呼び、料理人をコックと呼んでいた1960年頃の日本の水準からすれば、若き日の辻静雄の奮闘ぶりは歴史に残る挑戦で、本場のフランス料理、フランス料理店の話の一つ一つが、その道を目指す者でなくとも食文化に関心を

もつなら必読の書と言えるかもしれない。さらに日本の調理師学校のレベルを一段階、いや数段上のレベルに引き上げた辻静雄の功績はもっと知られてもよい。フランスから招いた一流シェフの面々に教えを乞うばかりでなく、逆に日本料理の名店を案内して和食の文化を伝え、後のフランス料理に影響を与えるきっかけを作ったのも辻静雄のまさに慧眼であった。

最後の随筆となった本の巻末には親交のあった丸谷オーの文章が添えられている(『料理に「究極」なし』辻静雄著／文藝春秋／1994年)。そして海老沢泰久が辻静雄の評伝を書いたのは、丸谷オーの示唆によるものだったらしいと向井敏が書いている(『美味礼賛』文春文庫版解説)。

2008年に日本版ミシュラン・レストランガイドが発表された。Yさんのいち推しカンテサンスは見事三つ星を獲得、以来15年三つ星を維持している。シェフは岸田周三氏。あの当時港区白金にあったレストランはもちろんグランメゾンではあるが、華やかというより穏やかで、清潔感に満ちていた。黒御影石のプレートに盛られたメインの肉料理はまだ日本のフレンチの主流ではなかった低温調理で仕上げられた見事な一品で、Yさんが応援するのも当然であっただろう。

一般向けのプログラムに気が向けば参加する程度で卒業生でもないのに、たまたま知り合ったフランスの名門料理学校同窓会の会長さんからなぜ声がかかったのかは謎だが、三つ星レストランの料理を味わうという得がたい体験となった。(埜村 太郎)

図書館を離れて (第60回)

— 続「おおかみと七ひきのこやぎ」 —

並木 せつ子

人間ってこんなもんですよ

「おおかみと七ひきのこやぎ」(以下「おおかみ…」)に関心を持つきっかけとなった上田萬年訳の『おほかみ』。まずは、ヤギではなくヒツジだったことに驚いたのだが、他にも小さな違和感を覚えるところがあった。オオカミが足を白くするために行った粉屋での場面——前足に白い粉をかけるよう言われた粉屋は一旦断ったものの、「おまえを喰ってしまうぞ」と脅され、すぐにオオカミの言うままなる——、そのすぐ後に続く「人間は、みんなこんなに弱いものである」という文章が、違和感の一つだ。

話の筋と関係は無いし、『ハッ山羊』にも載っていない。最初は上田萬年が付け加えたのだろうと考えた。なぜなら『おほかみ』には他にも、「このお話を聞くみなさんには、このときの女羊めひつじの心を察することが出来ますか」という、余計とも思われる言葉が入っているからだ。しかし戦前に出版された「おおかみ…」を読んでいるうちに、他にも「人間でも狼を恐がっています」「人間と言うものは臆病なものです」などの文章があるのを発見した。決定的だったのは大正初期に出版された3冊の「独語対訳本」(以下「独語対訳」)。3冊ともにこの文章が載っていて、訳者が勝手に付け加えたという疑念ははれたのである。

さらに(近くの図書館で入手できたものだけ)戦後生まれの「おおかみ…」も調べてみた。まず絵本(または絵本に近いもの)——例えば瀬田貞二約訳・ホフマン絵(福音館書店)／稗田宰子文・花之内雅吉絵(フレーベル館)／えんどうみえこ文・よしざわようこ絵(コーキ出版)／末吉暁子文・猫野べすか絵(フレーベル館)／海一慶子・文絵(小学館)——には入っていなかった。絵本以外では『初版グリム童話集』(吉原高志・素子訳)／『1812初版グリム童話集』(乾佑美子訳)／『語るためのグリム童話』(小澤俊夫訳 ※2版を訳した『完訳グリム童話』(ぎょうせい)を底本としている)にも入っ

ていない。

ところが7版の「グリム童話」を訳した本——例えば『子どもに語るグリムの童話』(佐々梨代子・野村法訳)／『グリム童話全集』(橋本孝・天沼春樹訳)／『完訳グリム童話集』(野村法訳)／『完訳グリム童話集』(池田香代子訳)／『グリムコレクション』(天沼春樹訳)／『グリム童話集』(佐々木田鶴子訳)／『グリム童話集』(相良守峯訳)／『完訳グリム童話』(若林ひとみ訳)／『グリム童話』(山口四郎訳)／『おはなしのろうそく』(東京子ども図書館訳)／『グリム童話』(池内紀訳)／『グリムの昔話』(矢崎源九郎訳)／『グリムの昔話』(大塚勇三訳)／『図説グリム童話』(虎頭恵美子訳)——には、「いやはや、人間ってこんなもんなんですよ」「人間というやつは、まあ、いつもこういうものなのだ」……など、“人間がいかに弱くいかげんなものか”を示す意味合いの言葉が入っていた。

大雑把にはあるが、絵本と、初版及び2版の「グリム童話」を訳した本には「人間は……」という言葉が無く、7版を訳した本の多くに入っているという傾向が見られた。

母ヤギは年寄りだった

もう一つ『おほかみ』で気になったのは、冒頭の「一疋の年とった女羊めひつじがあって…」というところだ。母ヤギが年寄りだったとは……。知らなかったと言うより、そもそも年齢など考えたこともなかったのだ。

他の本を確かめてみると、戦前の本では、「独語対訳」も含め半数近い本に「年寄たる」「老いたる」「老婆おばあさんの」「大変としより年齢寄の」……などの言葉が入っている。なかには「寡婦やもめの羊ひつじ」というのもあった(そう言えばどの本もシングルマザーのようだ)。戦後の本の場合、絵本と初版・2版の訳本では年齢に触れていない。7版の訳本では半数くらいに“年とった”ヤギであることが書かれ

ていた。

母ヤギのお出かけ

母ヤギが出かける目的は、出版年代にかかわらず“森・山・林”へ“食べ物を探しに行く”というのがほとんどで、絵本やさし絵のある本には、小さな手さげかごを手にしたり、大きなかごを背負ったり、鍬のような農具を持ったりする姿が描かれている。“森や山へ出かける”と言っても、食べ物を調達する方法はそれぞれ違うようだ。具体的に「飼草を採りに」と書いている本もある。

森・山・林以外に行く例は少ないが、日本最初の「おおかみ…」である『八ッ山羊』の場合は「^{まち}市街」へ行くことあり、母ヤギは手さげかごと棒(?)を手に持ち、くみやげによき物をたくさん買ってきてあげようと言っておいて出かける。採集生活者ではなく消費者なのだ。「金の星児童文庫」(1928年)の母ヤギは「毎日、乳を売って、衣物や食物を買ふために」出かける。『グリム童話』(原田實著 寺本書房1948年)の母ヤギは「配給物を取りに行く」ため出かけ、「配給所で大変ながく行列」したので時間がたってしまったと言いながら帰ってくる。作者の考えた設定や時代背景が反映されていておもしろい。

戦後の絵本には、帰ってきた母ヤギのかごの中身が具体的に描かれているものも数例あった。大根・キャベツ・里芋(のようなもの)だったり、リンゴと薬物野菜だったり、リンゴだけだったり、草のようなものだったり……。母ヤギが何を調達してきたか知ることができる。これにより“森へ食べ物を探しに行く”という行為を、作者がどのように想定していたか推し量ることもできるのだ。

昔のヤギはメエと鳴かない？

“オオカミに気をつけるよう”言い、子ヤギが“大丈夫”と答えるのを聞くと母ヤギは安心して出かける。その時に“メエと鳴く”母ヤギが多いことに気がついたのは、戦後の本を見ていたときだ。瀬田貞二訳の絵本(ホフマン絵)もくめえとないで、あんしんして「でかけました」とあるし、

他の「グリム童話集」の多くで、母ヤギはくめーめーとないで「メエと鳴き」「メエ、とひと声鳴いて」「くめえめえ鳴きながら」、安心して出かけて行く。まるで“メエ”と鳴くことが、安心して出かけることの合図であるかのように。

さかのぼって明治から昭和初期までの本を見返すと、「^{なき}鳴いて」というのが少しあるくらいで、どれも鳴き声にはふれていない。その中で具体的に鳴き声載っているのは、「独語対訳」だけで、それぞれ母ヤギは「震い声で鳴いて」「ぎゅうぎゅうと鳴いて」「ギャーギャーとないで」出かけて行く。ここで初めてヤギの鳴き声＝「メエメエ」が流布するのは、まだ先のことだと気がついた。ヤギそのものが身近な動物ではなかったのだから無理もない。いつ「メエメエ」になったのかわからないが、私が見た本の中で「メエメエ」が最初に登場するのは、1947年刊の『グリム傑作童話集』(相良守峯訳 羽田書店)だった。

声をよくする・足を白くする

こうして、何冊もの「おおかみ…」を見ているうちに、比較してみたくなったのは、オオカミが“声をやさしくする方法”と“足を白くする方法”だ。子ヤギに“お母さんならもっとよい声”のはず、“お母さんの足は黒じゃなくて白い”と言われ、オオカミはそれを是正すべく奔走する。

まず声をよくするもの。昭和以降の本では、ほぼ“白墨(チョーク)または石灰を食べる(飲む)”に定まってくるが、明治期には、『八ッ山羊』『おほかみ』をはじめ、薬屋(薬種屋)へ行って“声をよくする薬”を飲むという本が多い。中には「美音錠」という名まえの薬まである。大正期になっても薬を飲むオオカミはいるが、徐々に白墨(石灰)の方が増えてきて、そのまま昭和期へと続く。

「独語対訳」では、それぞれ「一つの大きな石灰の塊」や「大きな白墨を一本」「おおきな白墨の切」と訳されているので、原文はこちらが正解と思われる。<チョークが薬に変えられているのは、原文の内容が日本人にはわかりにくいと思われるからであろう>(野口芳子著『グリムのメルヒェン』

勁草書房 1994 年) という説には納得である。それにしても白墨や石灰で声はよくなるものなのだろうか？

『グリム童話集』(橋本孝・天沼春樹訳 西村書店 2013 年) には次のような注釈が載っている。

<むかし、商店ではチョークで売掛金を石盤に記した。支払いをめぐる争いが起こり、法廷にもちこまれると、訴えられた者はとたんに猫なで声をだしてまるくおさめようとしたことから、「チョークを食べる」というのは「おべっかを使う」とか「かん高い声で、言い訳わけをする」という意味になった。そこで、こういう声を出す人に対して、「あれはチョーク食べたみたい」と表現するようになった>

『挿絵でよみとくグリム童話』には、“「明治期のチョークは石膏チョークが一般的で」、「石膏は漢方薬の世界では、咽喉の炎症を抑える生薬としても用いられる」。これを踏まえて「声のよくなる薬」という訳語を選んだ可能性が考えられる” という趣旨の説が紹介されている。

『グリムのメルヒェン』には、<ドイツでは昔から庶民の間で「チョークを飲むと声が良くなる」と信じられているが、これは根拠のない迷信だそうで、日本で一般に「西瓜の種を飲むと盲腸になる」と信じられているようなものらしい>とある。さらに詳しくは「狼の喉飴は白墨？」(小栗友一『ドイツ文学研究』54 号) を参照されたい。いずれにしても本当に声が良くなるわけではなさそうだ。他に“油揚(あぶらげ)を買う明治のオオカミ”や、“生卵を飲む平成のオオカミ”(これについては後述) もいた。

前足を白くする方法は、“まずパン屋でねった粉(ねり粉)を塗り、次に粉屋で白い粉をつけてもらう”というのが、時代に関係なく多かったが、パンがまだ一般的でなかったと思われる時期には、ペンキ屋で白く塗る、のり屋でのりを塗る、パン屋は省略して粉屋だけで白くするというのもあって、訳者の苦心のほどがうかがえる。

絵本やさし絵には、パン屋さんや粉屋さんの姿が描かれていることも多い。それは人間だったり

動物だったりするのだが、ふっくらしたブタのパン屋さんを見ていると、こんなに苦勞してヤギにこだわらなくても……と思わないでもない。母ヤギのかごの中身もそうだが、文章に書かれていないところまで描かなければならないのが絵本の辛いところだ。

明治・大正の「おおかみと…」

訳者(文を書いた人)によって違いがあるのは当然だが、とりわけ明治から大正期にかけてはタイトルすら定まっていなかった。コヤギの^コだけ見ても「子、小、仔、幼」などいろいろな漢字があてられている。また、当時日本では珍しかった事物を、どのように日本の文章に取り入れていくか、あらゆる苦勞があったと察せられはするが……。翻訳というよりは、翻案、脚色、改作(?) のような例も多々あった。際立った変わり種を紹介しよう。

明治期にはヤギが、ネコやイヌやウシなど身近な動物になっている例も多い。『子猫の仇』(1895 年) は、オオカミの代わりに<病犬>。親猫は<外へ出て遊ぶんじゃに^{やまいぬ}ゃいよ [ないよ]> と言いつ聞かせ、<に^{やい}ゃい [はい]> と答える 5 匹の子猫、そして病犬が来ると一度も断ることなく戸を開けてしまうなど、かなり変更・省略がある。

『おおかみとこいぬのはなし』(1898 年) は、筋はあらかた同じだが、<いちろお><じろお><さぶろお><しろうお> という 4 匹の子イヌを持つ母イヌの話になっている。最後が<まずまず おめでとお ございます> という言葉で締めくくられているのも異色。『おほかみ』の訳者である上田萬年・校閲となっているからか、「おめでとお」のような表記へのこだわりがあるのも特徴的である。

『狼と七匹の^{こうし}犢牛』(1901 年) はウシになっているだけで、話の流れに大きな変更はない。母ウシを<老婆さん>と言っているのはこれである。「こうし」とルビのある見なれぬ漢字「犢牛」は、辞書によれば「犢」だけで「こうし」という意味だった。

巖谷小波の『羊の天下』(1904年)は「グリーンムお伽文庫」とあるが、劇用に脚色されていて全員に名まえがついている。母は白妙、子どもは角一、髭二、綿三、雪四、羅紗五、奴久六、愛七、オオカミは惣郎。<母羊白妙わ七匹の子を周囲において、頻りに大根を切つて居ります>という情景描写に始まり、母が大根の切つたのを子どもたちに与えた後、市中へ出かけて行くと、案の定オオカミに家に入られてしまう。そして末っ子が隠れた所は、なんと仏壇。大正期までは他の本でも時計ではなく、暖炉や鳥屋、額の後ろなどあったが、さらにわかりやすい場所にしたのだろう。

『狼と山羊』(村上静人編 1914年)は、概ねわかりやすい口語体の文章の中に、突如「己れ、我が子の仇敵!」とか、「やれ、待てしばし」、「やれ嬉しや、あの喰はれた可愛さうな子供たちは…」などのセリフ。大正の初めという年代を考えれば無理もない。

平成のオオカミ

前出“生卵を飲むオオカミ”は『おおかみと七ひきのこやぎ』(原作グリム兄弟 絵マルタ・バラガー 文久米稜 講談社 1994年)という絵本に出てくる。母ヤギは“かいもの”に出かけるという設定で、手さげかごには、ちゃんと財布が入っ

ている。1度目、声がしわがれていると追い返されたオオカミは、スーパーマーケットで卵を奪つて飲む。2度目、足が黒いと言われたオオカミは、パン屋でいきなり粉をかけさせ白くする。まんまと家に入ったオオカミだが、6匹のヤギをその場で食わずに自分の家へつれて帰った。毎日1匹ずつ食べるためだ。帰ってきた母ヤギが森の警察へ電話をすると、犬の刑事がパトカーで来て、オオカミの隠れ家を捜しだし全員無事救出。オオカミも死なない。——という具合に絵も話も現代風に変えられている。

そもそも、オオカミが卵を奪いに行ったスーパーマーケット、店内にいる客はすべてヤギとブタなのだ。こんな面倒なことをしてまで“七ひきのこやぎ”をつかまえる必然性が感じられない。また動物の着衣や二足歩行だけなら、異を唱えるつもりは全く無いが、この絵本の動物たちは皆、手の指が長くて5本指、さらに人間のような爪がついているのには違和感があった。

大幅な脚色・翻案はいつの時代のどの作品にもあり、これらは一例に過ぎない。ふとした疑問とちょっとした興味から、いろいろな「おおかみ…」を見たことで、どこまでを「グリム童話」と言ってよいものか、新たな迷いが生じてしまった。

(なみき せつこ)

DMがたろく

マネジメント神話
現代ビジネス哲学の真実に迫る ◎3960円
マシュー・シュワート 著 福岡大志 訳

大学生が**レイシズム**に向き合って
考えてみた 差別の「いま」を読み解くための入門書
貴堂嘉之 監修 一橋大学社会学部貴堂ゼミ生&院ゼミ生有志 著 ◎1760円

ダーリンはネトウヨ
韓国人留学生の私が日本人とつきあったら
クー・ジャン 著 訳 金みんじょん 訳 Moment Joon 解説 ◎1430円

生きづらさの民俗学
日常の中の差別・排除を捉える
及川祥平、川松あかり、辻本侑生 編著 ◎3080円

明石書店 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5
TEL 03-5818-1171 FAX 03-5818-1174 (税込)

ESTRELA ■2024年2月号
No.359/2月10日発行
B5判 64ページ
定価1,205円(税込)

[特集]データ活用とプライバシー保護技術

- 都市の熱環境把握に関するリモートセンシングの役割
白木 洋平(立正大学データサイエンス学部教授)
- 関東周辺域における近年の集中豪雨および局地的大雨の発生頻度
渡来 靖(立正大学地球環境科学部環境システム学科教授)
- データサイエンス教育における気象データの利活用のススメ
平田 英隆(立正大学データサイエンス学部専任講師)

公益財団法人 統計情報研究開発センター(Sinfonica)
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-6 能楽書林ビル5階
TEL : 03-3234-7471 <https://www.sinfonica.or.jp/>

子どもの「逆境」を救え

●予価1870円(税込)
ISBN 978-4-535-56426-8
若林巴子[著]

ACE(小児期逆境体験)を乗り越える科学とケア

貧困、ネグレクトなど子ども期の逆境体験は、後の人生に大きく影響する。その実態と、レジリエンスを育み困難を乗り越えるケアを探る。

3月中旬刊



●予価2750円(税込) ISBN 978-4-535-78979-1

フランシス・スー[著] 徳田 功[訳]

3月下旬刊

数学が人生を豊かにする

娯楽の中の青年と心優しき数学者の往復書簡
連邦刑務所の囚人と大学教授が織りなす、感動の実話!

日本評論社 〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
☎03-3987-8621 <https://www.nippyo.co.jp>

P. ゴールドスタイン / 大島義則・酒井麻千子・比良友佳理・山根崇邦 訳 著作権はどこへいく?

活版印刷からクラウドへ 米国著作権法の来し方に学ぶ。 3300円



平山 亮・佐藤文香・兼子 歩 編 男性学基本論文集

男性性はどのようにつくりあげられるのか。必読文獻。 3960円



勁草書房 TEL 03-3814-6861 *価格税込
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1 <https://www.keisoshobo.co.jp>

核不拡散と核軍縮の国際法

浅田正彦 著

核不拡散と核軍縮の主要問題を、国際法の側面から解説。関連の制度や事例を包括的に、その背景も含めて詳細に説明する。歴史を丹念に振り返りながら、今後の核不拡散と核軍縮のあり方を構想。

A5判 5,280円



地域とつながる中小企業論

長山宗広・遠山恭司・山本篤民・許 伸江 著

中小企業の経済的・社会的な役割とその存在意義を、とりわけ地域というつながりの場に見出す。サステナビリティとウェルビーイングの新時代における中小企業の姿を描き出す、未来志向のテキスト。

y-knot 四六判 2,420円



有斐閣 東京都千代田区神田神保町2-17
<https://www.yuhikaku.co.jp/> 価格は税込

台風や水害、地震や火山活動はなぜ日本に多いのか?

なぜ日本に多いのか?

長谷川直子
鈴木 康弘 編

自然災害が起きる理由を「地理学」の視点から解説!



978978
978978
978978

定価2,420円(税込)

2023年9月刊行 A5判 並製 224頁 ISBN:978-4-634-59204-9 C0025

山川出版社 〒101-0047 東京都千代田区区内神田 1-13-13
TEL 03-3293-8131 FAX 03-3292-6469 <https://www.yamakawa.co.jp/>

Think Asia

NO.54 2023 winter-winter

みんなの中に生きているオマールさん.....伴武澄
タルゴナ.....西井和弥
精霊信仰とタイの仏教

.....シュムブラング・ナッタデット

自由を求めて一近衛秀麿の守ろうとしたもの

.....石戸信也

幌子.....丁美堂

一般財団法人 **霞山会** (文化事業部)

〒107-0052 東京都港区赤坂2-17-47

電話:03-5575-6301 / FAX:03-5575-6306

<https://www.kazankai.org/>

リチュアル RITUAL

人類を幸福に導く「最古の科学」

①—ティミトリス・クシガラタス

認知人類学者、コネチカット大学・実験人類学研究所長

②—田中恵理香

世界を変えるための「最古の科学」が「儀式」だった！火渡りの祭礼から卒業式まで、儀式の秘密と活用のヒントを探究する空前の書。 2420円

晶文社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-11
Tel 03-3518-4940 <https://www.shobunsha.co.jp/>